

---

# チート少年リリカル純輝

ドライバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チート少年リリカル純輝

### 【NZコード】

N3333K

### 【作者名】

ドライバー

### 【あらすじ】

チートな力を持つた少年がリリカル世界で大暴れ！

注意、この小説は主人公チート＆最強、原作ブレイク、「ご都合主義」です。（後、ハーレムにもなるかも）ですからそういうのが嫌いな方は回れ右をお願いします。

文才の素人のド下手作品ですが、どうぞよろしくお願いします。

## 第0話 始まりの死亡（前書き）

どうも、ドライバーです、文才無いし、ド下手の素人ですが、よ  
ろしくお願いします。

今回は短いですが、これから長くするよじにします。

## 第0話 始まりの死亡

俺は中学生、15歳の「いくぶつづの少年、今、渋谷で服を買って秋葉原でiPodを安く買った帰り……だったのだが……突然死んだ。分かりやすく言うと……轢かれた、猛スピードのトラックに。

「なぜだああああーー！」

叫ぶ俺、現在死んだ自分を見下ろしていた。そして絶叫、他にやりたいことあつたのに……。

「ね・・ねえ・・・」

「ん？」

落ち込んでると、後ろから声をかけられた。目を向けると女性が立っていた。黒いロングヘアでスタイルの良い25ぐらいの。

「もしかして君・・・今死んだ？」

「・・・そうですが？」

「アツチャヤー・・・」

突然額に手を当てて苦い顔をする女性。

「・・・どうかしましたか？・・・といつかあなた誰？」

「私は・・・まあ、神ね。」

「・・・はい?」

突然とんでもない事を言つ女性・・・マジで?

「うん、マジ。」

何気に考えた事わかつてゐし・・・すげえな・・・で、なんの用なんだ?神自らお出迎え?天使じゃなくて?

「やけに落ち着いてるわね・・・」

これでも驚いてるんですけどね・・・

「まあいいわ・・・その・・・『めんね。』

突然頭を下げる神・・ホワッ?  
ツ

「実は・・その・・あなたが死んだの・・・手違いなんだよね。」

・・・・・へ?・・・まあ説明で大体分かった。天界で人を死なせるために人の名簿の名前を塗りつぶしてたら・・・間違つて死ぬはずでない俺の名前を塗りつぶしてしまつた。

「殴つてやろうか?」

青筋を浮かべて静かに怒る俺。

「まあまあ落ち着いて!お詫びに転生させてあげるから。」

「・・・へ？」

「もちろん元の世界で、は無理だけど、それ以外の世界で、後、お望みの力をあげる。」

「・・・アニメとかで原作破壊しますが？」

「かまわないわよ、ぶつちやけバラレルワールドだからアニメとかの原作とは関係無いし。どんなのが良い？」

「そうだな・・・遠慮無しで行くか。じゃあ、あらゆる神話とかアニメとかの作品の道具（兵器含む。）の想像可能。そして、あらゆる神話とかアニメに出てくる能力の使用が可能、後、ゲームとかの作品のモンスターとか幻獣を召喚する能力、そして純粋種のイノベイターで魔力は測定不能、身体能力は最強、というか超絶レベル、頭脳も超絶レベル、「答えを出す者」の能力も付けて、後デバイス作成とか工学の知識も。」

「本当に遠慮しないわね・・・」

「後、相棒みたいのが欲しいんだけど。」

「オッケー、じゃあこの子で。」

神が手をかざすとまばゆい光が出る。俺は思わず目をつぶる。そして、光が収まると、そこには、身長30cmほどの青白い長髪で翡翠色の眼をした美少女がいた。

「どーもー」

「・・・ユニゾンデバイス?」

まあそんな感じね。後この子名前無いから付けてあげて。」

「そうだな……じゃあ、お前の名は……アリスだ。」

「ね、かじました」

俺の胸に飛びつくアリス。可愛いな・・・言つておくが変な気は無いからな、美少女を可愛いと思うのは自然だろ。

「後は他にある?」

・・・・いや、大丈夫だ、ありがとう。

○ トキシキアラシ  
転生せんから頑張って

「おれはいつだお」

突然足元に穴が開いて落ちる俺とアリス

「頑張つてね」・・・そうだ、ついでだから容姿も超がつくほどのイケメンにしちゃお・・・あ、出生ミスつた・・・ま、いつか」

・・眼が覚めた。そこは、病院っぽい場所だった。そして、体に

違和感が・・ん?抱かれてる?つて・・・

卷之三

「ふんわやあああああ……（赤んぼになつとひじやねえかあああ……）」

「私の可愛い息子・・・貴方の名前は・・・純輝・・・純粹な輝きで・・・純輝。」

なんという展開・・・大丈夫なのか？

## 第0話 始まりの死亡（後書き）

はいどうも、というわけで第0話です。なんかチートにしきた  
ような・・・次は主人公達のプロフィールを書きますのよろしく  
お願いします。

## 第1話 神から依頼？（前書き）

よつやく1話投稿、文才が欲しいです・・・

## 第1話 神から依頼？

俺が転生して鶴神純輝になつてから4年半、俺は適当な広い場所にいた。

「さてと、アリス。」

「はいはーい、マスター。」

アリスの力を試すため。

「ユニゾン・イン」

とりあえず結界を張つてアリスとユニゾンする。アリスとユニゾンすることによって、好きなロボットの能力が使える。（ちなみにユータイプとかの能力も使用可能）とりあえず・・・

「ガンダムエクシア・ジャケットモード」

俺はガンダムエクシアの力を使う事にした。俺の体を刹那・F・セイエイのパイロットスーツと同じような

スーツ、そしてその上に白と青が基調のバリアジャケットが包み、右腕にGNソード、他にもエクシアと同じ武装が装備されていた。これはジャケットモード、元の機体の力は半分しか引き出せないが、体に負担はかかるない形態。

「よし・・ガンダムエクシア、アーマーモード。」

俺の体が光る。光が収まると、俺の体をガンダムエクシアと同じ

姿の鎧が包んでいた。これはアーマーモード、元の機体の力が100%引き出せるが、体に大きな負担がかかる、ここぞという時の形態。負担は元の機体の性能に比例して大きくなる。

「なるほど……」つやすげえな。」

「当然です」

アリスが笑顔で言う。とりあえずゴーランアウトしてアリスの頭を撫でる。

「へ

眼を細めて喜ぶアリス、可愛い奴だ。

「お、いい感じね。」

聞き覚えのある声が響く。後ろを向くと、俺をこの世界へ送った神がいた。

「はーい、お久しぶり」

「なぜここにいる?」

「いやー、あの後天界に戻つたら、上の神から『自分が転生させた人間の面倒は最後まで見ろ!』と、怒られちゃって……」

「そうか……」

見るからにいいかげんだつたしな……無理も無いが。

「そういういえばこの世界って、どんな世界なんだ？」

聞きそびれていた事を聞く。

「簡単に言えば、『魔法少女リリカルなのは』の世界よ、ちなみに無印の4年半くらい前ね。」

「まじで！－ラツキー、俺あの作品けつこう好きだったんだよな－、納得いかないヶ所もあつたが。まあ介入してその辺ブレイクすりやいいか。

「なにやら恐ろしい事考えてるわね・・・まあいいわ、ちなみに私の名前エルだから、何かあつたら呼んでね～」

そう言つて消えるエル。多分用は無いと思うが・・・さてと、能力のテストをやりますか。俺は右腕の肘から上を前に突き出す、その手首には黒いブレスレットが巻かれていた。そして、上空から口一カサスゼクターが飛来し、ブレスレットに装着される。

「変身！－」

ガチャツ

〔 h e n s i n 〕

俺の体を「一カサスの鎧が包む。

〔 c h a n g e - b e e t l e 〕

仮面ライダー「一カサスに変身する。なぜ一カサスかつて？見  
た目好きだから。

「かつて良いです、マスター」

眼を輝かせるアリス、俺も結構気に入ってるんだよな、何気に蒼  
いバラを構える。そんなキャラじゃないけどね、俺。バラはどうか  
ら出したかつて？暗黙の了解でお願いします。

「よし、帰るか。」

変身を解いて俺はアリスと共に帰路についた。そして家に到着。

「ただいま。」

「おかえり。」

居間で母さんがビールを飲んでいる。ビーフやら風呂上りらしい。

「また酒飲んでるの？」

「いーじやん、子供のくせに固い」と言わない。」

アル中になつても知らねえぞ。俺の母さんは見た目は18歳、じろ  
にしか見えないが、実は26の頃に俺を生んだ、そのため実は三十  
路を超えている。すげえな、翠屋の婦人といいムツツリの母とい  
この世界の女性はなんでこうも若いんだ？・まあどうでもいいが。  
そして母さんは拳法使いですげえ強い、この間も襲つてきた男10  
人をコテンパンにのした。前にも昔御神の剣士と互角に渡り合つた  
だの言つていた。・・・本当ならすげえな。

（そういういや後半年ぐらいでなのはの父親が大怪我するんだよな……）

（介入しますか？）

念話で語りかけるアリス。まあそうするかな、そのためもあるし。つーか、なのはの兄はなにやつてんだ？親父がいないからこそ妹の面倒を見るべきだつうが！まあその辺は後でどうにか・・としてて。

「半年は暇なんだよなあ・・デバイスを完成させるか。」

前から作つてたんだよなデバイス。密かに異空間に作つておいたラボに入る。入り方は俺のみぞ知る。ネギまの超のラボ（高畠とちびせつなが閉じ込められた所）のような感じ、俺が指を鳴らすと色々機械の乗つた作業台が現れる。

「じゃあアリス、頼んだぜ。」

「はーい、リアルモード！」

アリスが普通の人間のサイズになる。ここではアリスは俺の助手みたいな者である。けつこう優秀。

「じゃあまず、ここをこーして・・・あ、ミッドヒベルカひとつここ・・うん、混合させるか！・・・えーと、それからこうして・・アリス！そここの赤い奴取つてくれ。」

「はい、これですね。」

「おう、それから」—して・・おし、後はエネルギーを注入・・ア  
リスト、スイッチオン！」

「イエッサー！」

ガチャン！ヴィイイイン・・・

アリストがレーザーのよつな機械のスイッチレバーを入れる。機械  
の先に膨大なエネルギーが収束される。これは機械にエネルギーを  
注入する機械である。

ズビイイイイ！—！

デバイスに向かつてビームが打たれる。どつかで見たよつな・・・  
なんだろ。

「出来ましたよ～。」

お、完成したな。待期状態は銀色の觸體トクボのペンドントだ。觸體の  
内部に黒いコアがある。性格は・・ランダムにしてみた。その方が  
面白いから。

「よつ、お前がマスターか？」

・・・なんかすげえ乱暴な口調になつちつた。コアに文字が浮か  
ぶのではなく、言葉に合わせてコアが点滅する。

「おい、聞いてんのか？」

「お？・・・ああ。」

「やけにテキトーだな・・まあ、一応従つてやるがな、マスターだ  
しょ。」

「・・・じゃあ、まずテストしてみよう、セット・アップ！」

デバイスの性格はあいといて・・・俺の体を光が包む。そして、俺の姿はFFFのクラウドの肩あてが無い+半そで+襟なしver.の上にデビルメイクライのダンテのコートの黒ver.を羽織った服装（コートの右の袖は肘まで捲くつている）、手にはクラウドとダンテを合わせたようなグローブ（手がダンテで穴の開いた部分に銀の金属板、手首の部分がクラウド）を着けていた。そして、背中には鎧に髑髏の装飾が付いたデカイ大剣。鎧のコアを髑髏で覆つている。

「どうよー。」

「ふーん、なかなか良いじゃん。」

「当たり前よ、俺のセンスは一級品だぜ。」

「わうはおもこませんが。」

「ああ？なんつったチビー！」

「なーチ・・チビつて・・」

「チビにチビと言つて何が悪いチビー。」

「ムキーー何を言つんですか、」の下品でクロー。」

〔言つたなークソガキー。〕

「やめろー。前らー。」

「の一人馬が合わなそつ・・・不安になつてきました。」

「まあ、機能とか形態とかは後々追加するとして、名前をどうするか・・・。」

「かつこーい名前を頼むぜ。」

「じゃあドクちゅんせじつですか?」

「てめえは黙つてひ。」

「つーん・・・じゃあ、レクイエムでどうだ?」

〔鎮魂歌か・・悪くねえな、良こだろ?。〕

「じゃあよろしくな。」

〔おつー。〕

俺はレクイエムを待期モードにしてラボを出る。すると、ビームからモルが出てきた。

「やつせー。」

「…………何の用だ？」

「…………なんか冷たいわねー。まあいいわ、ちょっと頼まれてくれない？」

「断る。」

「報酬は充分に出すけど、今の状況をなんとかしてあげなくもないわよ。」

「…………」

正直生活に困った。父さんが死んでから母さんは無職でフリーター。

「まあいい・・何だ？」

「こいつの神がちょっと大失敗をやらかしちゃってねー、色々な世界に色々な怪物が現れちゃったのよ。」

「なんで自分達で解決しない？」

「私達がやると私達の存在が公になっちゃうかもだから、下界のちょうどどいい人物に頼む事にしたのよ。」

「で、俺に白羽の矢が立つたと？」

「うん。」

「…………この天界はなぜにこうテキトーなんだ？」

「そんなもんよ、神なんて。」

心を読みやがった、ここつ・・・

「じゃあまず、これからおねがい。」

エルはやう言つて怪物の絵を見せる。ライオンのよつた体に赤い  
髪、といつかじれつて・・・

「ヴァジコラーヴ。」

「ラシディーターのアラガリ、ヴァジコラだつた。」

「なんでこれが?」

「ゲームとかの怪物も僕おれるつている。」

「じゃあまさかあれも・・・」

怪獣王ワジラとかも現れるのか?出来ぬならやつたくなえ。

「出るかもね。」

「こちこち読むな。で、ビックに行けばいいんだ?」

「いの世界よ。」

その世界は今の地球と同じほどの科学文明を持つた世界だった。

「恤ひておへなじ、これだけじやないから、じやあ、たのんだわよ。

L

「おー、待て、まだ準備・・・」

ショウ

## 第1話 神から依頼？（後書き）

といえず、次回はなのは、そしてアリサ達と（トングフレビおつ）のハラグ立てと（かか）の遭遇。引き続きよろしくお願いします。

## 主人公達の設定（前書き）

遅くてすいません。主人公達の設定です、これから増えるかも。

## 主人公達の設定

主人公  
名前 鶴神純輝  
つるがみじゅんき

年齢 なのは達と同じ

容姿 顔 すゞい美少年（エルの氣まぐれでこうなつた。）

髪 F Fのクラウドみたいなツインツンだが、少々ウルフヘアみたいになつてゐる。色は白銀、ユニークンすると縁に変わる。

眼 若干吊りぎみの赤い眼、ユニークンすると右が金に、左が銀になる。

体格 すらりと細身だが、それなりに筋肉はついてゐる。無駄な肉無し、同年代では背が高く、実年齢より少し上に見える。

CV 内山昂輝

魔力資質 EX（測定不能）

魔法術式 ミッド式、古代ベル式、バビロン式。（バビロン式とは、二つの術式を元に純輝が創つたオリジナルの術式、様々な属性の魔法が使える上にミッドとベル式、両方の長所を併せ持つ。名前はかつこいいから決めた。魔方陣の形はまんま遊戯王の『六芒星の呪縛』（

身体能力 超絶（生身で仮面ライダーと戦える。普段は魔法でセ

一歩してゐ。 )

頭脳 超絶 (デュフォー以上、アンサー・トーカー答えを出す者付き)

能力 色々な作品の能力や技を使つたり、アイテムを想像したり出来る。 (まれにマシンを想像して自分なりに改造したりしている。 ) ちなみに純粋種のイノベイター (なんとなくなりたかつたらしい。 )

性格 基本的にはアバウトで優しいが、けつこう喧嘩好きで傍若無人な一面もあり。

仲間たち

名前 アリス

容姿 顔 ふつうに美少女

髪 青白い長髪

眼 垂れ気味の翡翠色

体格 背はリインやアギトより頭一つ高い、スタイルは下の中くらい。 )

CV 折笠富美子

魔力資質 SSS +

魔法術式 純輝と同じ。

能力 いろいろな作品の技が使える。（但し、なぜか魔法限定）  
性格 純輝にべったり、基本はおとなしく明るいが、早とちりな一面があり、よくそれで純輝に注意される。

備考 エルが純輝のために生み出した純輝専用のユニゾンデバイスで、純輝とのユニゾンにより、好きなロボットの技や能力が使えるようになり、魔法の威力も倍以上に上げる事が出来、単体での戦闘能力もオーバースランク魔導士をはるかに上回るこれまたチートの融合騎。

デバイス

名前 レクイエム

分類 戦闘用多機能統合人格搭載試作型ハイブリッドデバイス（アームドデバイスの武器としての性能とインテリジェントデバイスの魔法補助性能にブーストデバイスの機能も付けた万能型デバイス。）

A.I 男

声 中井和哉

見た目 待期状態 黒いコアを銀色の髑髏で覆ったペンダント

1stフォーム ブレイカー 両刃の黒い馬鹿でかい大剣、バルディッシュのザンバーフォームより一回り大きい。

2 ノドフォーム イレイザー デザートイーグル並の大きさの真っ黒い二丁拳銃

3 レッドフォーム ジュノサイド プラストインパルスガンドムのケルベロスのような二つの大砲、遠距離の砲撃に特化。

4 テトロフォーム アサシン 日本刀のような刀、黒い柄に髑髏が口を開いた形の塚、髑髏の開いた口から刃が伸びている。刃は伸縮自在。

フルドライブ ハルマグドン 禍禍しい2メートル程の片刃の大剣（先のほうが鎌のよう外側に曲がっている）を二つ持つてあり、二つつなげることで砲撃の使用が可能。

バリアジャケット FF7のクラウドと同じ服装（但し、肩あてが無く、半そでで襟は無い）の上にダンテのコートの黒いバージョンを羽織っている。そして手には手の甲と指の付け根の部分に金属板の付いた黒いフィンガーレスグローブ、手首の部分にクラウドと同じアーマー。

材質 オリハルコン

機能 ???（他にもあるが、無印では使わない。）

性格 他のデバイスに比べて我が強くて荒々しく、口調も荒いため、従順というわけではないが、なんだかんだ言つて結局純輝を信頼している。しかし、アリスとは仲が悪く、口喧嘩が多い。ちなみに会話する時はコアに文字が浮かぶのではなく、言葉に合わせてコアが蒼く点滅する。

備考 純輝が自分用に作った試作型のデバイス、説明からしてチートキャラのために作られたようなチートデバイスであり、人工知能の性能や補助性能もレイジングハートやバルディッシュをはるかに上回る。頑丈さにおいても桁外れであり、スターライトブレイカー以上の砲撃を撃つても全然負担にならない。（元々純輝の化け物級のチートな魔法出力に耐えるように出来てるので）

## 主人公達の設定（後書き）

なんか自重をやめたらこうなった・・・まあいいか、後悔はしてません。

## 第2話 大変な一日（前書き）

どうも、遅くなりました。どうも。

## 第2話 大変な一日

あれから半年、俺はなんとなく公園に来ていた。すると、茶髪の女の子が泣いてるのを発見、あ、そつか、時期的にこの時期だっけ? なのはが一人になるの、見て見ぬふりもなんだしどりあえず声かけるか。

「どうしたんだ?」こんな所で泣いて。」

「ふえ?」

顔を上げるのは。

「良かつたら、話を聞こつか?」

「えつとね、お父さんが仕事で大怪我して入院しちゃったの・・・」

「お母さんは・・・?」

「お母さんはお店が忙しいの、お姉ちゃんも、お兄ちゃんは・・・」

兄の事を話さうとした瞬間沈黙、その表情は明らかに怯えていた。

「怖いの・・・? お兄ちゃん。」

「・・・うん・・・」

ほつぽり出すだけじゃなく怖がりせんとは・・・なのはの兄はいつちょ ぶぢやお話 しどくか。

「それで一人なんだ・・・じゃあさ、俺と遊ばない?」

「え・・?」

驚いた表情。

「遊んでくれるの・・・？」

「もちろん」

「わあ！ ありがとー！」

一気に明るくなつた。やっぱ寂しかつたんだな・・

「じゃあ、あなたの名前は？」

「なのはの名前はなのはなのー。」

「俺は、鶴神純輝、よろしくね。」

それから俺らは色々な話をして色々遊んだ。そしてその後、俺は  
こつそり士郎さんのいる病院に入つて、士郎さんの体に治癒魔法（  
体の治りがメチャ早くなる）をかけた。さすがにいきなり治つたら  
不自然だしな。

そして、ある日の休日、俺は道を歩いていた。

「キヤアア――――――――――！」

・・・なんだ？暴漢か？ふと後ろを向くと車が一台猛スピードで通りすぎる。その中にほ、金髪の少女・・あれ？・・・アリサじゃね・・・？

何やつてんだ？行かねえのか？

喋るレクイエム、当然行くぜ！

ふつ・・・だらうつな。

とりあえず運転手のおじさんが怪我してたから病院まで送った後、すぐに飛んで追跡する。

「レクイエム、アリサの位置は？」

北北西に3・527kmだ！

「OK-！」

全速力で飛ばす。

あの廃ビルだ！

レクイエムがレーザーを一つの廃ビルに当てる。

「分かった！」

窓からビルに突っ込む、中には縛られて猿轡さるのりをされているアリサ、それとガラの悪い男が数名。とあれ？・・あの紫の髪の女の子・・すずか！？・・ＷＨＹ？『ホワイ』・・何で？

「運がよかつたな・・・」

「ああ・・・まさか月村のお嬢まで手に入るとは・・・」れでますます利益が上がるし・・・何より楽しめるな。」

「チツ・・・ロリコンが・・・ま、そつそつ俺もだけど・・・

なんて驚いてる場合じやねえな・・・

「おい。てめえら。」

「あ・・・なんだてめえ!?!?」

「ガキがなんの用だ?」

「さあな・・・これから悪人を倒すから・・・正義の味方つて所か?」

そう言いながら俺は『ディエンドライバーを取り出し、カードをセツト。ツト。

『カメンライド・ディ・エンド』

ディエンドに変身。

「なんだありやあ?」

「けおどしか?んなもん通じるか!」

様々な武器を取り出す男達。悪いけど・・・

「てめえらの相手はここにつだ！」

『カメンライド・ライオトルーパー』

ライオトルーパー3体を召喚。

「な・・なんだ？」

驚き戸惑う男達。

「頼んだぜ。」

『ハツ！』

突っ込むライオトルーパー達。その間にアリサとすずかを救出・・  
ん？すずかの頭に血が・・

「なあ、おい。」

俺は手近な男に聞く。

「ああ！？なんだ？」

『Jの子殴ったの・・誰だ？』

「俺だよ、散々暴れたそいつが悪いんだからなー！」

「うか・・掴まえるくらいで許してやるつとおもつたが・・やめ  
た・・

## パチン

俺は指を鳴らす。すると・・・

ドガアアン！

俺が改造したKMF、ガウエインがラボから転送される。ガウエインは腕を突っ込んで男を驚撃みにする。

「な・・なんだこりや！？・・・が・・・あ・・・ギヤアアアアー！！」

ベキボキバキ

ガウエインがそのまま指を動かして男の腕やらあばら骨を碎く。そしてそのまま離す。どうやらライオトルーパーによつて他の奴らも捕まつたようだ。すずかは氣絶でアリサは・・眼が点になつてゐる。まあこんだけ非現実的なを見せられちゃあな。反省、反省、しかし後悔はしていない！

レクイエム 何言つてんだか・・・

若干呆れ氣味のレクイエム。とりあえず一人の拘束を解く。

「あ、あんたいつたいなんなのよあれ！」

詰め寄るアリサ、落ち着け。

「落ち着けるわけないでしょ！その服もあの変な服連中もあのロボットもなんなのよ！」

変な服連中で・・・ライオトルーパーか?ん?ロボットつて・・

(なあレクイエム、俺、ガウェインの迷彩・・)

忘れてたな、思いつきり、安心しろ、周りにや誰もいねえ。

(そつか、良かつた。)

「ちょっとあんた、黙つてないで説め・・」

とりあえずアリサを眠らせた後、二人を家まで送った。犯人共は警察へGO、今日は色々大変だったなあ・・アリサと再開した時大丈夫かな・・

自重しなかったお前の自業自得だろ。

るせい。

### 第3話 想定外、しかしボッコボコ。（前書き）

原作キャラとの遭遇です。（予定外の）

戦闘シーンがきつい・・文才が・・欲しい。

感想の受付を制限無しにしました。（ユーモアのみになつてたのは間違いです。）

### 第3話 想定外、しかしボッコボコ。

あれから4年とちょっと、俺は砂漠世界でスケルトン数体と戦つていた。

「メガグラビトンウェーブ！！」

俺はスケルトン共を引力で引き寄せて全身からのエネルギー波で全滅させる。

「よし、片付いたな。」

はっ！物足りねえな。

「所詮はザコだからな。数だけだよ。さてと、アリスはどうかな？」

アリスには別の方を任せておいた。まあ問題ないと思うが・・・とりあえず念話。

（マスター！助けてくださいーーー！）

（！？ どうした！）

まさか新手のモンスターが！？

（突然知らない人が現れ…きやあ！！ バインド・・・）

知らない人・・・まさか・・・とりあえずそこに向かう。

そして俺は到着…まさか、こんなに早く会つとはな・・

「おまえがこのデバイスの所持者か？」

クロノ・ハラオウングアリスを捕らえていた。

「てめえ、俺の家族をどうする気だ？」

「こ」のデバイスからはSSSHオーバーの魔力を感じる、だから管理局が確保するんだ。」

「は～な～し～て～。」

「ふざけんな！誘拐がてめえらの仕事か！…！」

「つるさい！お前には無許可での魔法行使もあるんだ！逮捕されないだけ有難いと思え！」

ブツツイーン

ドゴン…

「ぐはっ…！」

カチンと来たからとりあえずアリスを奪い返して腹に蹴りを入れて吹っ飛ばす。

「うえーん、マスター。」

「よしよし…」

アリスの頭を撫でてやる。

「くつ・・貴様、公務執行ぼう・・」

ドカン！

「があ！・！」

今度は顔面に蹴り。

ガツン！ ドゴン！ ドン！・！

そして左右から顔面にフックを決めた後、腹にもう一度前蹴り。  
許さねえ・・

「マスター！・！」

アリスに呼ばれる。

「私も・・」

「ああ。」

「「「ゴニゾン・イン！・！」」

ゴニゾンして機体をイメージ、俺が変身したのは・・青い体、白い角とヒゲ・・ソウルゲインだ。

「くッ・・・」

立ち上がるクロノ、しかし、バインドで拘束。

「なー！」

「終わりだ・・ソウルゲイン！フルドライブ！・・」

両手にエネルギーを溜め、飛び上がる。

「いけえ！」

両手から連續で多数のエネルギー弾を打つ。

一 はあつ！！

ガン!! ドゴン!! バキッ!! ドカカカカカン!!

煙の中に飛び込んで連続で殴り飛ばす。

ブワア！！

殴り飛ばしたクロノが煙から出る。俺はそれを追つて

「はあ！」

ガンツ！ バキツ！

「がは！」

「せえい！！」

ズガツ！ ガンツ！

「げふう！」

「でええいつ！…！」

ゴンツ！ ガツ！ ガスツ！

「つがああ！…！」

「つおおおおおお…！」

ガガガガガガガガガン！！

「つあああああ…！」

ガツン！…！

「かはあ！…！」

拳や蹴りを連続で叩きこんだ後、クロノを上空へ吹っ飛ばす。そして俺は、両腕のブレードにエネルギーを溜める。

「コリット解除！ コード麒麟！…！」

そして俺は、クロノに向かって飛び上がり -

「でいいいやつ - - - 」

ザンッ - -

右腕のブレードで切り裂く。クロノはそのまま地面に落ちて、意識を失った。

「はつ - 殺されないだけ有難いとおもにな。」

そして俺はそのままにして転移する。何か呼び止めるような声が聞こえたが、無視して自宅に飛ぶ。もちろん、追跡は出来なくしておいた。そして、自宅に戻った俺は -

バフッ

「マ、マスター！？」

あー、疲れた・・やつば高性能な機体のアーマーモードはきつこな・

ていいか俺の台詞あれだけかよ。

### 第3話 想定外、しかしボッコボコ。（後書き）

これが原因でクロノはあのシーンでもボコられます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3333k/>

---

チート少年リリカル純輝

2010年10月10日15時49分発行